

# セルジュ・クラルスフェルト作『フランスのショア』 をめぐって

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2017 年 10 月 1 日 受理)

## 1. はじめに

1939 年 9 月に第二次世界大戦が勃発し、その翌年 6 月、フランスはドイツと休戦協定を結ぶとともに、ドイツ占領下の北部占領地区とペタン元帥率いる政府が発足した南部自由地区、ドイツに併合されたアルザス・ロレーヌ地方に引き裂かれた。そのうち南部自由地区に誕生したのがペタンを国家主席とするヴィシー政府であり、ナチスのユダヤ人絶滅政策へ全面的に協力し、フランスに在住していた約 30 万人のユダヤ人のうち約 7 万 6,000 人が強制収容所へ送られ、アウシュヴィッツから生還したユダヤ人はわずか 2,000 人ほどであった。また、逮捕者の 7 割が外国籍をもつユダヤ人だった（註 1）。

しかし、1980 年代まではナチス・ドイツによって支配された時代はフランスの歴史として認められず、レジスタンスの歴史が絶対的なものとされた。副首相及び首相を務めたラヴァルやペタンの裁判でも、収容所移送に関しては一言も言及されず「ユダヤ人問題は完全に隠蔽されていた」（註 2）。

セルジュ・クラルスフェルト（1935～）は、長い間、フランスが正面から向き合うことのなかった、ショア（註 3）の記憶の忘却と戦い続ける歴史家、弁護士であり、1979 年、「フランス被追放ユダヤ人子息子女」協会（l'association 《Les Fils et Filles des Déportés Juifs de France》、以下 F.F.D.J.F. と記す）を結成し会長に就任、現在に至っている。また、ヴィシー政権下のフランスのユダヤ人に関する著作や資料集も多数ある。主なものに、フランスからアウシュヴィッツをはじめとする絶滅収容所に強制移送された 7 万 6,000 人近くのユダヤ人の氏名、生年月日、国籍、そして、移送列車の番号も記載した『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』が挙げられる（註 4）。その他にも、収集した資料群や写真、それらに基づき作成された年譜や解説をまとめた『フランスのショア』（第 1～4 巻）（註 5）がある。なかでも犠牲となった 3,000 人以上もの子供たちの写真を収録した『フランスから強制移送されたユダヤ人の子供たちの記念名簿』（第 4 巻）は、見る者の心に強く訴えかける。

## 2. パトリック・モディアノ『1941 年。パリの尋ね人』

フランスの作家パトリック・モディアノによる『1941 年。パリの尋ね人』（註 6）は、

先に挙げたセルジュ・クラルスフェルトの『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』に衝撃を受けたことによって生まれた、ほぼノンフィクションの小説である。この作品が1997年にフランスで刊行されるや否やベスト・セラーになり、わが国を含む世界13か国で翻訳され、2014年にはノーベル文学賞を受賞した。その理由は、本書が「忘却の彼方にある人々の運命を思い起こさせ、ナチス占領下の世界の人生を描き出した〈記憶の芸術〉」であるためということであった。

『1941年。パリの尋ね人』は、日本語版のために訳者が編集部と相談してつけた書名であり、原題は『ドラ・ブリュデール』(Dora Bruder)である(図1)。モディアノはドラという、実在した無名のユダヤ人少女の名前を書名にした。作者が彼女の名を最初、偶然に見つけたのは、1988年に目にした半世紀近くも前の新聞に掲載されていた〈尋ね人広告〉で、その内容は次のようなものであった。



図1

「尋ね人。ドラ・ブリュデール。15歳、1メートル55、うりざね顔、目の色マロングレー、グレーのスポーツコート、ワインレッドのセーター、ネイヴィーブルーのスカートと帽子、マロンのスポーツシューズ。パリ、オルナノ大通り41番地、ブリュデール夫妻宛情報提供されたし。」(1941年12月31日付の新聞『パリ・ソワール』紙の広告)(註7)

モディアノはパリ18区オルナノ大通り付近をよく知っていたので、この記事に興味をおぼえ、こうしたドラについてのわずかな情報を手がかりとして、彼女を追跡する忍耐強い旅を開始する。まず4年かかって少女の誕生日を調べ、さらに2年をかけて出生地を知り、「この世に生きた証拠などろくに残していない人たち」ードラと両親、周辺の人々や、作者の父親などー、また、作者自身の人生をも交錯させながら、彼らが生きた時代を追体験しようと試み、ほぼ10年もの歳月をかけて本書を執筆した。次にドラと両親がアウシュヴィッツに移送されるまでの経緯を記す。

ドラの父親エルネストはウィーン生まれのユダヤ人で、フランス外人部隊に入隊するが負傷のため契約解除となり25歳でパリに戻ったのち、ブダペスト生まれのロシア系ユダヤ人セシルと結婚し、1926年2月25日、パリ12区で娘ドラが生まれた。一家はオルナノ大通りの安ホテルに住んでいた。ドラは気の強い反抗的な少女だったようで、1940年5月、キリスト教系の聖心マリア会寄宿学校に入学したものの、1941年12月14日に脱走した直後、両親は〈尋ね人広告〉を出したのである。この年の5月には外国籍のユダヤ人



図 2



図 3

の大量逮捕が開始、父エルネストも 1942 年 3 月に逮捕され、アウシュヴィッツの「控えの間」であるパリ北東部のドランシー収容所（註 8）に移送された。同月 27 日には、フランス北部のコンピエーニュからアウシュヴィッツに、最初のユダヤ人移送列車が出発している（図 2, 3）。ドラは母親宅に戻るが幾度か家出を繰り返したため、1942 年 6 月には女性の拘禁センターであるパリ 20 区のレ・トゥーレル収容所に送られ、2 か月後にはドランシー収容所へ移送された（図 4）。また、母セシルも 1942 年 7 月 16 日〈ヴェル・ディヴ〉一斉検挙（註 9）の日に逮捕され、同じくドランシーに強制収容された。そして、父エルネストと娘ドラは 9 月 18 日、アウシュヴィッツに向かう第 34 移送列車に他の男女千人とともに



図 4

に乗せられ、1943 年 2 月 11 日、母も第 47 移送列車で同じ道をたどり帰らぬ人となった。

ここでパトリック・モディアノについて紹介したい。彼はウィーン生まれのユダヤ人の父とベルギー・アントワープ生まれの母のもと、1945 年にパリ近郊ブローニュ＝ビヤンクールで生まれた。モディアノは「私は占領時代の汚物から生まれた」と語っている。父親は、ナチス占領下のパリでユダヤ人弾圧が厳しさを増すなかで、偽造身分証明書をを用いた闇のブローカーとして生き残った。モディアノは 1968 年、22 歳のとき処女作『エトワール広場』で華々しく登場し、1972 年『パリ環状線通り』でアカデミー・フランセーズ大賞、1978 年『暗いブティック通り』でゴンクール賞を受賞した。映画化された作品に、『イヴォンヌの香り』（ル・コント監督）や『ルシアン青春』（モディアノが脚本執筆。ルイ・マル監督）がある。

これらの小説の特徴は「巧妙な語り口と喚起力の強い簡潔な文体を駆使し、今と昔（特に占領下時代）の混在した不安の色濃い謎めいた雰囲気の中に、アイデンティティを求めて得られない人生の余計者や落伍者を好んで描く」ところにあると指摘されている（註 10）。今や「モディアノ中毒」という言葉があるほど人気が高く、「生きている最も偉大な

フランス作家」と称されるパトリック・モディアノに決定的な影響を与えたのが、クラルスフェルトの著作であった。実際、『フランスから強制移送されたユダヤ人の子供たちの記念名簿』（2001年版）には、ドラと両親の写真やモディアノがクラルスフェルトに宛てた直筆のメモ、書簡、及び1994年11月2日付『リベラシオン』紙に掲載された彼の記事が収録されている（註11）。これらの資料から、モディアノが『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』（1978年版）及び『フランスから強制移送されたユダヤ人の子供たちの記念名簿』（初版の1993年版）に強い衝撃を受けたことが明らかであり、彼は『リベラシオン』紙でも次のように語っている。

「（前略）私はここ十年以上にわたって忘却と闘いつづけているクラルスフェルト夫妻に深い敬意の念を表する。私はセルジュが、私も含め多くの人たちに、人生最大の衝撃の一つを与えてくれたことに感謝している。

彼の『記録名簿』は、私が正面から見つめる勇気のなかったものを、そして私が表現できなかったある居心地の悪さの理由を、私に明らかにしてくれた。私が処女作を書いたときは若すぎて、本質的な問題で策を弄してしまった。占領下の反ユダヤ主義ジャーナリスト連中に対して、ずけずけと言い返してやろうとしたのだ。だがそれは、恐ろしいときに自信ありげにふるまって安心しようとするようなことであり、暗闇で大声をあげて話をしようとするようなことだった。セルジュ・クラルスフェルトの『記録名簿』が刊行されて以来、私は自分が変わったと感じた。今や私は、自分がどのような居心地の悪さを感じていたかがわかったのだ。

まず私は文学に疑いをもった。文学を生み出す主要な原動力はしばしば記憶なのだ。だから書かねばならなかった唯一の本はセルジュ・クラルスフェルトが書いたようなこの種の『記録名簿』であるように私には思えた……。私はセルジュ・クラルスフェルトが示してくれた規範に従おうとした。何日も何日もこの『記録名簿』をひもときながら、私は一人ひとりの人生に関するなにか補足的な事実、住所、どんな些細な情報でもよいから見つけようと試みた……。」（1994年11月2日付『リベラシオン』）（註12）

この頃、すでにモディアノは『1941年。パリの尋ね人』の小説の構想をもっていたと考えられ、クラルスフェルトに宛てた書簡から、1995年3月から1996年7月にかけて、モディアノはクラルスフェルトから、ドラと家族の写真や彼らに関する情報を得ていたと思われる。そして、クラルスフェルトが『記念名簿』を作成することにより、忘却の彼方へ置き去りにされたそれぞれのユダヤ人たちの人生を可視化する記憶の作業を根気強く行ったように、モディアノもドラとその周辺の人々に対する記憶の作業を試みたのである。その原動力となったのが、クラルスフェルトの『記念名簿』であった。1995年6月

20日にクラルスフェルトに宛てた手紙のなかでモディアノは、「この『記念名簿』は、私の人生において最も重要なものです」と記しているほどである（註13）。

### 3. 「あるフランス人の青春」

1994年9月12日、当時の大統領フランソワ・ミッテランはテレビ局「フランス2」の番組において、青年時代に右翼思想に影響を受けヴィシー政府に参画したのち、1943年からは転じて、レジスタンス運動に身を投じた自身の過去を公表した。

その同じ日、セルジュ・クラルスフェルトは『リベラシオン』紙に以下のような「フランソワ・ミッテランへの手紙」を発表した。

「大統領閣下、去る4月27日に私達がイジューの家で向かい合ったとき、長い沈黙の後で、あなたは意見を述べられるのを諦めたのか、ただ両手の大きな身振りで対話の不毛さとあなたに対する私の態度への非難を表現されておられました。しかしながら、あなたがブスケ事件に関する裁判の途中で妨害をしようと望んだ1990年のあの悲しい日まで、私が決してあなたに逆らって介入してはいなかったことをご存知でしょう。

とは言え私は古くからヴィシーの元警察長官とあなたの関係を知っていました。しかし、フランソワ・ミッテランが類い稀な力量のこの人物と結んでいた友好関係は、人間を束縛するだけのものであって、大統領を縛るものではなかったのです。

ですから私は、あなたの右翼ベタン派から対ドイツのレジスタンス活動への道筋が完全に名誉あるものであるにせよ、その体制が国家的反ユダヤ主義であり、かつ第三帝国によるユダヤ人問題の最終的解決に実効性のある協力をしたことを知らずに1942年にヴィシー政権にあなたが参加したにせよ、1949年の訴訟の際に、隠蔽された反ユダヤ主義行動についてブスケに下された判決を妨げようとするのを、あなたに許可するものではないとはっきりお知らせしたのです。（……）

1992年に、私は同様に、11月11日が来るたびにその墓にひとつの花束を定期的に供えることによって、形成される、フィリップ・ペタンへの卑屈ともいえる名誉回復のこの企てに終止符を打ってみようと思決心したのです。（……）

あなたはこうして、ドイツの要求により警視庁が行ったという、しかしブスケ、ラヴァル、ペタンへの同意も必然的に伴ったはずの、ヴェル・ディヴの卑劣な一斉検挙を国家的な記念日として制定しました。あなたが成し遂げられたことは、大統領閣下、さんざん傷つけられたユダヤ人の記憶にとっては大変大きなものです。あなたは私のしつこい要求に対して、クラウス・バルビーのフランスへの強制送還を手配することに承諾しました。あなたは大統領として初めて、ヴェル・ディヴの跡地にやってこられ、さらにもう一度戻ってこられました。あなたはイジューの子どもたちの家を

創設しました。(……) あなたはこれを爆発しそうな思いを抱えながら成し遂げた。とにかく、あなたはそうに成し遂げたのです。そして嘘偽りなく私は、同時代の他の共和国大統領にはこれは成し遂げられなかったであろうと思います。

この傲慢なほどの矜持、これもまた証明されています。というのは、1943年2月12日、オート・アルプ県にあるモンモール城におけるあの決定的な会議にあなたが出席していたときに、ここであなたはアントワヌ・モデュイの影響下でレジスタンスに公然と参加していたのですが、私もまた、モンモールにいたのです、7歳でしたが…。」(註14)

セルジュ・クラルスフェルトは1935年、ルーマニア系ユダヤ人の実業家の父とロシア系ユダヤ人の母のもと、ブカレストに生まれた。しかし、ヴィシー政権下、ナチスの追跡から逃れるため、一家はフランス中南部の自由地域を転々とし1943年、父は、青年だったミッテランが所属するレジスタンス組織に加わったこともあり、当時、セルジュは7歳だった。しかし、親衛隊大尉アロイス・ブルンナーの指揮のもと、同年9月30日に行われた一斉検挙により、ニースでゲシュタポの家宅捜索に遭遇してしまう。用心のため家の戸棚の背後に用意していた密室に家族を匿い、父のみが検挙され、強制移送されたアウシュヴィッツ=ビルケナウ収容所で翌年死去し、残された家族は終戦までシヨアから生き延びた。

戦後、クラルスフェルトはパリ大学で政治学を学び、1963年、ドイツ人のベアテと結婚し、一男一女をもうけた。しかし、ヴィシー政府が積極的にシヨアに加担した事実は、フランスでは1970年代まで隠微されており、第五共和政のドゴール、ポンピドゥー、ジスカール・デスタン、そして、フランソワ・ミッテラン政権下においてはレジスタンスの歴史が絶対的なものとされてきた。その一方で反ユダヤ主義が進行していたために、この現状を打破すべくクラルスフェルト夫妻は戦いを開始した。

歴史家セルジュ・クラルスフェルトのもう1つの顔は「ナチ・ハンター」である。弁護士、活動家として、まずフランスにおけるユダヤ人強制移送を主導しながら長く処罰されなかった主要なドイツ人責任者を裁判にかけることから始まり、1980年にはドイツ・ケルンでクルト・リシュカ、ヘルベルト・ハーゲン、エルンスト・ハインリッヒゾーンが裁判にかけられようやく有罪となった。また、リヨンのゲシュタポ隊長であったクラウス・バルビーについても1971年に南米で発見し、1983年にリヨンに連行、1987年には終身禁固刑を宣告されている(1991年病死)。

しかしながらその矛先がナチス・ドイツに協力したフランス人に及ぶと、事はさらに困難を極めた。すでに1972年から、リヨンの親ナチス民兵団の責任者ポール・トゥビエに対する告訴に取り組んだが、逮捕されたのは1989年、隠れ家となっていたニースの修道院であり、1994年4月、終身判決を受け、1996年7月に獄中で死去している。1979年



3月には、パリでユダヤ人を強制移送した警察副長官ジャン・ルゲが起訴されたが、公判開始前の1984年2月に死去した。さらに、1978年にはヴィシー政権の警察長官であり〈ヴェル・ディヴ〉事件の責任者だったルネ・ブスケに対する告訴に着手した。しかし、ブスケとミッテランの交流は戦後もずっと続いており、1991年にブスケはようやく起訴されたが1993年に自宅で暗殺された。そして、ジスカル・デスタン政権下で予算担当相を務めたモーリス・パボンが1981年、ジロンド県の事務総長に就任した1942 - 44年の間に、子供たちを含む1,000人を超えるユダヤ人をドイツ当局に引き渡した過去が暴かれ、1983年に起訴された。しかし、裁判が開始されたのは1997年10月からであり、94回の公判を終えて禁固10年が言い渡されたのは1998年4月2日であった。

しかし、1991年にルネ・ブスケが起訴されたために〈ヴェル・ディヴ〉事件も問題化されたことにより、ミッテランは1992年、〈ヴェル・ディヴ〉50周年の年に大統領として初めて跡地を訪問し、花束を捧げた。また、クラルスフェルトらが中心となって激しく批判したペタンの墓への献花についても、1992年11月11日を最後に中止、また、翌年2月3日、大統領令により「人種差別主義と反ユダヤ主義による迫害を追悼する国家の記念日」を制定した。そして、1994年7月17日には、「ヴェロドローム・ディヴェールのユダヤ人犠牲者の広場」に犠牲者たちを表象する記念像を設置し（図5）、その落成式で演説を行ったが、国家の責任について言及することはなかった。



図5

このようなミッテランに対して、クラルスフェルトは先に挙げた「ミッテランへの手紙」を1994年9月12日付の『リベラシオン』紙に発表し、ヴィシー政権へのミッテランの関与や、戦後も続いたブスケをはじめとする対独協力者たちとの交流、また、ブスケに下された判決を妨害したという衝撃的な事実を明らかにした。しかもこの日は、ミッテランが「フランス2」の番組で、自身の過去を公表した日でもあった。その約2か月後の11月2日、今度はモディアノが「セルジュ・クラルスフェルトとともに、忘却に抗して」と題する記事を同紙に寄せたのは偶然とは考えにくい。『1941年。パリの尋ね人』（原題『ドラ・ブリュデール』）は、クラルスフェルトを範としたモディアノ版『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』であり、歴史の忘却への抗議の意が込められていたと考えられる。

ミッテランは以前から前立腺癌に苦しみ、政権末期は死期を悟っていたという。この年、ヴィシー政権に傾倒した過去をジャーナリストのピエール・ペアンとのインタビューのなかで自ら告白した『あるフランス人の青春 フランソワ・ミッテラン 1934 - 1947』が出版された。『あるフランス人の青春』に、それはどこにもある「ひとつの青春」にす

ぎないというミッテランの自己正当化の論理があったとすれば（註15）、『ドラ・ブリュデール』もまた（ドラはフランス国籍を取得）、「あるフランス人の青春」であったと、モディアノは強く訴えたかったのではないのだろうか。

#### 4. むすびにかえてー 2017年7月16日のマクロン大統領の演説から

1995年5月、ミッテランに続き、ドゴール派政党を率いたジャック・シラクが第22代フランス共和国大統領に就任した。その約2か月後の7月16日、〈ヴェル・ディヴ〉事件53周年の追悼式典に出席し、「フランスはあの日、取り返しのつかないことをしました」と大統領として国家の責任を初めて認める演説を行い、国民の72%がこのシラクの姿勢を支持した。その後、2005年の首相ドミニク・ド・ヴィルパン、2007年の大統領ニコラ・サルコジと首相フランソワ・フィヨン、続く2012年には大統領フランソワ・オランドもまた、シラクの姿勢を否定することなく継承することとなった（註16）。

そして、2017年5月に大統領に就任したエマニュエル・マクロンは、〈ヴェル・ディヴ〉75周年にあたる7月16日、イスラエルのネタニヤフ首相を招き、新たに公園に生まれ変わった跡地にほど近いセヌ河岸で行われた追悼式典で演説を行い、冒頭で以下のように述べた（註17）。

「イスラエル首相をはじめ、今日、ここにいるご参列の皆さん。

今日、この厳かなる日に、私が皆さんと共にこの場所にいるのは、1995年にジャック・シラクが紡いだ糸を受け継ぐためにほかなりません。私は彼に対して、本日、特別な敬意を捧げたいと思います。彼が紡いだ糸は、2005年のドミニク・ド・ヴィルパン、2007年のニコラ・サルコジとフランソワ・フィヨン、そして2012年にはフランソワ・オランドによって受け継がれてきました。

これまで、政党の区別なしにフランス共和国の歴代権力者が築いてきたものは、すべての歴史家がそれを事実と認め、国民意識によって堅固なものとなりましたが、それに対して今なお、真実を後退させようと異論を唱えるフランスの政治家たちがいます。彼らに反応するのは、こうした偽造者を認めることであり、しかし、黙することもまた悪で、同罪に値するのではないのでしょうか。

改めて言いましょう。1942年7月16日と17日、一斉検挙と強制移送を実施し、住居から連行されたユダヤ教徒のほぼ全員にあたる13,152人を死に至らしめたのは、紛れもなくフランスでした。そのうち8,000人は〈ヴェル・ディヴ〉を経てアウシュヴィッツへと移送され、そのうち4,115人は2歳から16歳の子供でした。私たちは、今日、この子供たちの記憶により特別な敬意を表し、彼らのために黙祷を捧げたいと思います。

私は、ヴィシー政権はフランスではなかったと主張するすべての人の方便と空論を



拒絶します。なぜなら、ヴィシー政権は確かにすべてのフランス人ではありませんでした。ですが思い出してください。ヴィシー政権は紛れもなくフランスの政府であり行政機関だったのです。

1942年7月16日と17日、ピエール・ラヴァル政府と、ユダヤ人問題総合委員会委員長だったルイ・ダルキエ・ド・ペルボワ、そして、知事のルネ・ブスケの命令に従い、作戦を実行したのはフランス警察でした。

ただ一人のドイツ人も、そこに手を貸しませんでした。(前略)

フランスはその過ちを認め、償いのための道を開きました。それはフランスの偉大さであり、過去を直視することができる命ある国家としての証です。そこには、自分たちの意識を試し、犠牲者とその子供たちに手を差し伸べる国民の勇気があります。手を差し伸べ、絆を再び結ぶことは、何かよくわからない悔恨に屈服することではありません。それは成長することであり、強さを表すものです。」

続く演説のなかでマクロンは、セルジュ・クラルスフェルト著『フランスから強制移送されたユダヤ人の記念名簿』について幾度も言及し、同氏と F.F.D.J.F. の業績を称えた。それらの内容は以下の通りである。

「子供たちが受けたひどい苦痛については、今日、私が改めて正式に感謝を申し上げたいセルジュ・クラルスフェルトが、涙と、言葉を絶するほどの憤怒を禁じ得ない一冊の本に根気強くその素顔を集めておりますが、同氏が大切にしていたこれらの子供たちは、今、あなた方の子供たちであるだけでなく、私たちの子供たちでもあります。」

「そうです。私たちは戦います。殉教した方々の強烈な痕跡、彼らの氏名、年齢、住所をたどるために欠かすことのできないこの記憶の作業を通じて、私たちは戦います。打ちのめされたこうした存在と我々の現実をごくごく細い糸で再び結び付けるこうしたすべてのものは、残虐行為がそこここに、通りの片隅に存在したことを、私たちに思い起こさせます。」

「この意味において、クラルスフェルトの団体が数十年前から行ってきたことは、極めて重要であり、私たちの深い感謝に値します。」

「私たちは、加虐者たちの言葉が優位に立たないようにするために戦います。1978年、『レクスプレス』誌は、当時まだスペインに亡命していたルイ・ダルキエ・ド・ペルボワを見つけ出しました。彼はなおも反ユダヤ主義の悪魔にとらわれていて、強制移送に熱心だった自身の行動に一切の後悔も示しませんでした。彼は、アウシュヴィッツ

ッで「毒ガスはシラミにしか浴びせられなかった」と断言しました。その時、彼は自分自身に相対していました。人々がなおも口をつむんでいたときに、静寂同然のなかから立ち上がりました。それまで、このテーマについて上がっていたのは、シモーヌ・ヴェイユ（註 18）の妥協なき尊大な声でした。そして、同じ年、セルジュ・クラルスフェルトは、フランスのユダヤ人の強制移送に関する記念名簿を出版しました」。

7月16日の追悼式典の日、〈ヴェル・ディ ヴ〉の跡地に新たに設けられた、犠牲になった3,900名の子供たちの氏名と年齢を刻んだ壁を前にして、クラルスフェルトはマクロンの横に立ち説明をした。そして、この日の演説全文がF.F.D.J.F.によって、7月20日付の『フィガロ』紙に全面2ページにわたり掲載された。

クラルスフェルトと「かつての子供たち」の戦いはまだ、終わっていない。

#### 【註】

- 1) フランスにおけるホロコーストの歴史については以下の文献を参照。渡辺和行『ホロコーストの歴史』人文書院、1989年、Jacques Fredj, *Les Juifs de France dans la Shoah*, Gallimard, Mémorial de la Shoah, 2011, ジョルジュ・ベンスサン著『ショアーの歴史』（文庫クセジュ）、白水社、2013年。管野賢治『フランス・ユダヤの歴史』（上・下）、慶應義塾大学出版会、2016年。
- 2) シモーヌ・ヴェイユ著『シモーヌ・ヴェイユ回顧録』、バド・ウィメンズ・オフィス、2011年、99頁。筆者はシモーヌ・ヴェイユと記した。
- 3) 「ショア」（もしくは「ショアー」、Shoah）は元来、ヘブライ語で「災厄、破壊、悲嘆」を意味する。1939年から1945年にかけて、ナチス政権下のドイツは、多くの共犯者とともに600万人にも及ぶヨーロッパのユダヤ人を殺戮した。その実態をあらわすため、1つの共同体がショアによって壊滅される場合に用いるこのユダヤ教祭儀用語が使用されることもある。しかし、一般的には「ホロコースト」として知られているため、筆者は、パリのショア記念館と引用文献に「ショア」が使われている場合をのぞき「ホロコースト」を用いた。
- 4) Serge KLARSFELD, *Le Mémorial de la Déportation des Juifs de France*. 1878年に初版、2012年にF.F.D.J.F.より新版が刊行された。Mémorialを「記念名簿」または「記録名簿」と邦訳する例があり、筆者は前者にした。
- 5) Serge KLARSFELD, *La Shoah en France*. 2001年にFayardより新版が刊行された。この書には次の4巻が含まれる。  
Tome1. *Vichy-Auschwitz la «solution finale» de la question juive en France*, Fayard, 1983, 1985 et 2001.  
Tome2. *Le calendrier de la persécution des Juifs de France juillet 1940 - août 1942*, F.F.D.J.F., Fayard, 1993 et 2001.  
Tome3. *Le calendrier de la persécution des Juifs de France septembre 1942 - août 1944*, F.F.D.J.F., Fayard, 1993 et 2001.  
Tome4. *Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, F.F.D.J.F., Fayard, 1993, 1995 et 2001.
- 6) Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Gallimard, 1997. 白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』（作品社、1998年）がある。小説とその時代や作者について解説をした訳者のあとがきも参照されたい。原題である『ドラ・ブリュデル』は日本の読者には馴染みのない名前のため、邦題は編集部と相談のうえ変更したということである（白井成雄、同上書、173頁）。
- 7) *France Soir*, 31 decembre 1941. p3.

- 8) パリ北東郊外にあった中継・抑留収容所。1941年8月から1944年7月まで約6万5,000人のユダヤ人がここから移送された。
- 9) ヴェロドローム・ディヴェールは冬季自転車競技場のこと。〈ヴェル・ディヴ〉(ヴェロドローム・ディヴェールの略称)事件とは、第二次世界大戦中、占領下のフランスで1942年7月16、17日に行われた、パリと郊外在住の1万3,000人以上ものユダヤ人の大量検挙のことである。
- 10) 『新潮世界文学辞典』新潮社、1996年、1142頁。
- 11) Serge KLARSFELD, *Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, op. cit. pp.534-538.
- 12) 《Avec Klarsfeld, contre l'oubli》, *Libération*, 2 novembre 1994. 白井成雄、前掲書、181-182頁(白井訳を引用)。また、記憶が砂漠化することへの恐れとそれへの懸命の抵抗という点におけるクリスチャン・ボルタンスキーとの共通性も指摘されている(湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモニュメント』, 水声社、2004年、234-236頁)。
- 13) Serge KLARSFELD, *Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, op.cit. p.7.
- 14) Beate et Serge KLARSFELD, *Mémoires*, Fayard Flammarion, 2015, pp.550-551(筆者訳)。  
また、クラルスフェルト夫妻については以下の文献を参照。藤村信『夜と霧の人間劇 バルビイ裁判のなかのフランス』岩波書店、1988年。
- 15) 渡邊啓貴『現代フランス』(岩波現代全書067)、岩波書店、2015年、91頁。
- 16) ジャック・シラクが市長・首相・大統領時代に行った、第二次世界大戦下のフランスで犠牲者となったユダヤ人を追悼した演説10篇、メッセージ2篇、書簡1篇を含む計13篇が収録された、セルジュ・クラルスフェルト編集による冊子が、F.F.D.J.F.より2007年に刊行された。その全訳(松岡智子監訳、野田四郎共訳)とセルジュ・クラルスフェルトの序文、渡辺和行の解説、松岡智子あとがき・解題を付した『ジャック・シラク フランスの正義、そして、ホロコーストの記憶のために』(明石書店、2017年)を参照されたい。とりわけ1995年7月16日の演説は、フランスの大統領としては初めて、〈ヴェル・ディヴ〉事件への国家の関与を公の場で認めたとして知られている。
- 17) 《Discours de M. le Président de la République, Emmanuel Macron, le 16 juillet 2017 lors de la commémoration des victimes de la rafle du Vélodrome d'Hiver et hommage aux Justes de France》, *Le Figaro*, 20 juillet 2017, pp.12-13.
- 18) シモース・ヴェイユ(1924～2017)はアウシュヴィッツの生還者。パリに生まれ、パリ政治学院卒業後、法務大臣を経て、ジスカール・デスタン大統領時代の保健大臣、欧州議会議員、ミッテラン大統領時代の第2次保革共存政権の社会問題・保健・都市問題大臣、憲法院議会議員、2010年からフランス・アカデミー終身会員。1974年に人工中絶の自由化を実現。その後も欧州統合の推進、人権、とりわけ女性の人権等に取り組む。2017年6月30日死去、国葬ののち、パンテオンに埋葬された。

#### 【図版】

- 図1. パトリック・モディアノ『ドラ・ブリュデル』(2017年)の表紙。
- 図2. ドランシー収容所跡地入り口中央の慰霊碑。現存する建物は賃貸住宅として使用されている。
- 図3. ドランシー収容所跡地に展示された、アウシュヴィッツへユダヤ人を移送した家畜輸送用貨車。
- 図4. ドランシー・ショア記念館。2012年9月21日、フランソワ・オランド元大統領が出席し、開館式が行われた。パリのショア記念館から毎週日曜日午後2時に小型バスで出発し、ドランシー跡地と記念館を解説付きで見学する無料のツアーが開催されており、筆者は2014年3月にこのツアーに参加した。
- 図5. 「ヴェロドローム・ディヴェールのユダヤ人犠牲者の広場」に設置された、収容所から生還したウォーター・スパイザーによる記念像。1994年7月17日、落成式でミッテラン元大統領は演説を行った。  
なお、図2.～図4.は2014年3月、また、図5.は2016年3月に筆者が撮影したものである。

本稿は、独立行政法人日本学術振興会2014年度及び2016年度科学研究費補助金〈基盤研究(C)〉に基づき行われた調査・研究によるものである。

## On Serge Klarsfeld's *La Shoah en France*

Tomoko MATSUOKA

*Collage of the Arts,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*  
(Received October 1, 2017)

Serge Klarsfeld (1935-present) is a lawyer and historian who continues to fight against the obliteration of memories of the *Shoah* (Holocaust), which took France such a long time to face. He has authored many writings and collections on French Jews under Vichy France. One of his major works is *Le Mémorial de la Déportation des Juifs de France* (1978; new edition: 2012) where he publishes the name, birthdate, nationality and train number of close to 76000 Jews who were sent from France to concentration camps, such as Auschwitz, and never came back. In addition, in his *La Shoah en France* (vol. 1 to 4, 2001), he gathered documents and pictures to produce a commented chronological record of what happened. Both books were of great shock to many people.

One of them was the French author Patrick Modiano, who won the 2014 Nobel Prize in literature. Modiano's *Dora Bruder* is a novel born out of the influence he suffered from Klarsfeld's *Le Mémorial*. The book brings back to life the fate of people who were lost in oblivion and depicts how life in a world under Nazi occupation was.

In this paper I will bring up facts that show that, by reviewing the Vichy France period, Klarsfeld also exposed the right-wing past of former French president, François Mitterrand. And lastly, I will also present parts of a speech given by France's new President, Emmanuel Macron, on July 16<sup>th</sup> 2017, on the occasion of the 75<sup>th</sup> anniversary of the Vél d'Hiv Roundup. On such speech, President Macron quotes from Klarsfeld's *Le Mémorial* and praises the author for his achievements.